
威厳

藍村 泰

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

威厳

【Nコード】

N0978K

【作者名】

藍村 泰

【あらすじ】

《緋の楽園》 《哀しみの泉》の関連作。

常に気高くあることを要求された。それは僕が生まれ落ちた時から課せられたことであり、他の誰も代われないことだ。

常に気高くあることを要求された。それは僕が生まれ落ちた時から課せられたことであり、他の誰も代われないことだ。不平など零せようか。日々の生活さえも圧迫され、考えることさえも出来ない者達が大勢いるこの世界。これ程恵まれているというのに、まだ望むなんて、僕はどこまで傲慢なんだろうか。

解放されたいと、願ってしまう。

「ロイ父上」

澱んだ外の景色を眺めていた父上は、呼びかけに反応して碧の双眸を此方へ向けた。僕の赤褐色の髪とは正反対の色彩を放つ、滑らかな父上の髪は、彼の気性を表しているかのような銀である。まだ二十七と若い父上は使用人達が騒ぐのも領けるくらい、見目麗しい息子である僕から見てもそうなのだ。他人から見たらもっと感動する容姿に違いない。赤の国の女神が産んだ生きた芸術品と評したのは、異国から来た吟遊詩人だったか。

赤の国と呼ばれているこの国だが、この城内には“赤”という色がことごとくない。この謁見室も、紺碧の絨毯にカーテンと、青が主体だ。飾り物も殆どなく、最低限の品しか置かれていない。全体的に、落ち着いた色調だ。先王の御代までは赤一色で、献上された贅沢な品々が氾濫していたが、父上が王になつてからは全てが様変わりしたらしい。人伝てに聞いた話なので、僕は詳しく知らないが、自分も真紅よりも紺碧の方が好きなのは自覚している。確かに華やかではないだろう。しかし、城内が華やかなのと国が潤っているのとは必ずしも正比例しない。反比例していることが多いと言える。

「どうした、リーオ」

父上が僕の名を呼ぶ。こうして面と向かって話すのは、いつぶり

だろうか。

「バレング公爵の第一子パーミットとリーラの婚儀の準備が整ったそうです。父上にもご報告申し上げます」

物憂げな表情を浮かべ、父上は王座に据えられた立派な椅子から立ち上がった。僕とは似ても似つかない容姿が際立つ。

「……………リーラは、了承しているのか？」

「それはもう。この国のためならば我ら姉弟、己の身など惜しくもありません」

これは事実である。僕より三つ上に当たるリーラは、結婚の話が来た時、素直に喜んでいた。バレング公爵と言えば、生粋の貴族であり、莫大な財産を保有している。バレング公爵との繋がりを持つことが出来れば、財政援助をしてもらえる。それは近年頭が痛い飢饉に対抗し得る、唯一の手段だった。それは父上もわかっているはずだ。政略結婚など、この上流階級にとっては日常茶飯事である。

例えば王族であっても、それは変わらない。誰かに頼らねば解決出来ない事態は多々ある。

「しかし……………」

父上はリーラの気持ちを気にしているのだろう。冷たい面持ちをしていながら、人の痛みに敏感なのが父上の長所だ。しかし、敵と認識すれば、旧知の仲でも簡単に切り落とせる狡猾さも有しているからこそ、ここまで赤の国は領土を拡大出来た。王になるべくして生まれた人だと心から思う。そんな父上だからこそ、僕もリーラも助けたいと思っているのだ。

「父上、民のためです。民を飢饉から救うにはまず、劣悪な環境下に置くことを避けねばならない。そのためには多大な資金が必要なのです。バレング公爵は、婚儀を了承してくれるのならば、必ず全面的に資金援助をしてくれる。彼ほどの方ならば、この状況を打破出来るくらいの資金を提供してくれます」

してくれなかった時は、攻め落とせばいいのです、と付け加えることも忘れなかった。時に残酷なことを決断しなければならぬの

が王たる者の宿命である。

「では、ご報告はこれで終わりですので。失礼致しました」

適度な位置で頭を垂れ、踵を返した。これからすぐに向かわなければならぬところがある。自然と歩調は速くなった。ブーツが磨かれた床を鳴らす。

「リーオ」

鋭い口調が僕を引き止めた。拳を強く握って立ち止まる。大理石で出来た床には自分の顔がはっきりと映っている。何て情けない顔をしているのだ、と密かに自分を罵倒した。

「喪った者は帰ってこない」

重い。とても重い一言である。誰かを喪ったことのある者だけが重みを持たせることの出来る一言だ。

「リーチ兄さんは、帰ってこなかった。僕の手から、赤の国から滑り落ちていった。あれほど、赤の女神に愛されていたながら」

父上は、王としての彼でなく、一人の人間として自嘲的に話していた。

勇猛果敢で慈悲深く、容姿端麗。全ての讃辞は赤の国の第一王子たるリーチⅡエルバスⅡグルードに降り注ぐ。黄金色に似た赤褐色の髪は燃える赤を象徴し、胸の内から溢れる光は民を導く。王に資格がいるならば、リーチ以外に王と認められる者がいようか。

幼い頃から誰もがそう繰り返し繰り返し語った。遙か遠い過去を懐かしむように、遠くを見ながら。付け加えるならば、リーラや僕とそっくりな容姿をしたリーチⅡエルバスⅡグルードはクリス伯母上の双子の兄に当たるらしい。

僕は再び父上に向き直った。父上は疲労困憊した様子で椅子に座り直す。いつも堂々としている父上が、少しだけ小さく見えた。

「リーチ伯父上が、王になるべきだったと？　そう父上は言いたいのですか」

「その通りだ」

僕は下唇を噛んだ。力加減をせずに思いきり噛んだので、鉄の味

がする血が滲んだ。

「皆、間違っている。慈悲深い者が王たる資格を持てるならば、なれる者はごまんといましょう。聞き及ぶ限りでは、リイチ伯父上には汚い部分が一つもなかった。誰もが彼を謳った。王は潔癖であるべきでしょうか、王は誠実であるべきでしょうか。汚れを憎むのは簡単です。しかし、民を守るために、王は汚れなければならぬ。そうでなければ、王でない誰かが汚れを背負うことになるからです。一気に長年思ってきたことを吐露したので、息が上がった。父上はショックを隠しきれずに、もたれていた王座から飛び起きる。

「リーオ！ お前、何を言っ——」

「リイチ伯父上もわかっていたと思いますよ。自分よりも、父上が国を担うべきだと」

リイチ「エルバス」グルードは、切れ者だったとも聞いた。ならば、彼自身も気付いていたはずである。父上の持つ、人を呑み込む雰囲気や利他的な精神に。

父上は顔を両手で覆って頭を左右に振った。

「違う。僕は、王という位置に就くべき人間ではない。今でも、この国を破壊したくて堪らないというのに。このまま僕がここにいれば、近い未来、きっとこの国は滅びる。内面から崩れていく。この場所は、兄さんのために用意された場所なんだ」

僕は目を瞑った。父上は気付いていないが、彼はこの国を、壊したくなるほどに愛している。こんなにも王に愛された国があるだろうか。こんなに未来を案じてもらえる国があるだろうか。ああ、赤の国は絶対に絶やしてはならない。これから先、何が起ころうとも決して亡国にしてはならない。

「父上が、王座にすることが、答えなのです」

尊敬に値する人物だとは今まで感じていたが、今日ほどそれを痛感した日はない。こうなったら、自分の手が黒く染まっても恐れることはしまい。

「お前は、さぞ立派な王になるだろうな」

目を細めて言う父上の優しさに、胸が熱くなった。

「そうなるよう、努力します」

「ここだけの話、リーラにも望む結婚をさせてやりたかった。私の力不足だ……」

「いいえ、リーラは望む結婚など出来ませんよ」

即答した僕に、父上は疑惑と困惑の入り混じった表情を向ける。

彼が不安に思っていることは、もう既に現実となっている。父上も本音を、まだ十四になったばかりの若輩者である僕に明かしてくれたのだ。墓場にまで持って行こうと思っていたことを、彼にだけは明かしてもいいかもしれない。父上の顔が憂鬱げに歪む。

「お前がどれだけリーラを慕っているか、私は知っている」

不意打ちを喰らった。ここでこのような言葉を聞くとは思わなかった。意識していないのに、体が強張る。厳粛な雰囲気を保つ謁見室が、いつぺんに色を変えた。僕は父上に悟られないように細心の注意を払い、笑顔を象った。

「ええ、リーラのことは、とても大切に思っています。たった一人の姉ですから」

父上は僕の科白を聞くや否や苦笑に近い表情を見せた。僕が嘘を吐いていることなど、見破っているに違いない。やはり、秘密を明かすにはまだ覚悟が足りないようだ。掌が汗ばんでいる。

「……………そう、だな。お前達なら、私とクリスのようにはなるまい」

彼が言いたいことが何なのか、僕には容易く理解出来た。父上にははいない。妃もいない。ならば、何故、リーラや僕がいるのか。その答えはすぐに捻り出せた。正式な場では決して言えない者との間に出来た子供。例えば下級身分の者、それでなければ、血の近い者——父上にはクリスという姉がいた。彼女は僕が産まれた頃に亡くなったらしい。こうは考えられないだろうか。僕を産んだことで彼女は死んだ、と。子供を産むことは死と隣り合わせる。父上の部屋に飾られている彼女の自画像は、リーラと瓜二つだった。

禁忌の先にいるのがリーラと僕だとしたら。王族にとって汚点となる。だから、真実は深い闇の海の奥底に沈め、庶民の女との子供だと表面上は取り繕っている。ややこしいことだ。

あまりのおかしな連鎖に笑いが込み上げてくる。過ちに悩んだ日々が、一瞬で霧散した。父上と同じ道を、知らず知らずのうちに僕は辿っていたのだ。許されることではないのは重々承知している。だが、やめると言われても、もう戻れない。

僕は何も言わずに、今度こそ謁見室を出ようと歩を進めた。

「パーミットとリーラが結婚したら、もうお前とリーラは今のうちに気軽には会えない。いずれ、お前も別の女性と結婚し、王位を継ぐことになるだろう」

努めて冷静に、父上は言った。

僕は扉を開け放ちながら、彼を振り返った。

「わかっています。僕もリーラも、国が大切なんです。互い以外に好きになれる者がいないとしても」

父上が息を呑んだのがわかった。

静かに、ゆっくりと扉は閉まった。まるで、僕と父上を隔てる違いを見せつけるかのようだ。そのまま佇んでいても仕方がないので、さっさと螺旋階段を下りることにした。

一階の最奥に、リーラの部屋がある。僕の部屋と同じ間取りのはずなのに、彼女の部屋は優しい匂いがする。部屋は性格を表すというのは本当らしい。目を閉じるだけでリーラを細部まで思い出すことが出来る。すぐに手に届く位置に彼女がいる時間は後わずしかない。今のうちに、しっかりと憶えておかないと、一人枕を濡らすことになり兼ねない。僕は男だ。それだけは避けたいところだ。

「……………」

リーラの部屋の扉を開けた途端、飛び込んできたのは、リーラの涙だった。

「あ、リーオ。やだ、ちゃんとノックしてって何度言えばわかるの」
赤く充血した痛々しい目を何度も擦って、リーラは笑顔を見せた。

いつもの満開の花が風になびくような美しい笑みではない。無理をしているのがわかる。

「リーラ、無理しないで。僕相手に作らないで。全て受け止めるから」

懇願に近い声色で、僕はリーラに言い募った。そのまま彼女を抱きしめる。僕の腕の中で、リーラは讒言のように、結婚したくないと呟いていた。そんなリーラに、僕は抱きしめて唇を寄せてやることしか出来ない。

大きな歯車を、補助的な位置にあるネジが止めることは不可能だ。もし、このように切迫した状態でないなら、いくらバレング公爵の息子であるパーミットにも譲らない。醜い独占欲は今も身体中を駆け巡っている。いっそ、パーミットを殺してしまおうか、と思った夜は片手では数えられない。

隣に眠るリーラの髪をすきながら、今日も必死に昏い衝動を抑え込む。

「解放されたい」

赦されるなら、僕を取り巻く環境全てから解放されたい。

分厚いカーテンは美しい朝陽をも遮る。光は嫌いだから、ありがたかった。

僕は、国を愛してなどいない。常に気高くあるよう教育されたおかげで、外面は良いだろう。しかし、父上やリーラのようにはなれないし、そうは言ってもリイチ伯父上のようにもなれない。愛しているのは、リーラだけだ。彼女が好きな赤の国が好きただけだ。

それでも国を守るうとしているのは、王子として産まれた僕に課せられた義務だからに他ならない。

—— 威厳を保つためなどという陳腐な理由では、ない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0978k/>

威厳

2010年10月8日15時23分発行